

— 使徒言行録5章・12-16、黙示録1章・9-11a、12-13,17-19、ヨハネ20章・19-31—
十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。
—ヨハネ 20章—

信じる人になる

私たちは、日曜日を「主の日」と呼びます。それは、主イエスが、私たちを訪れてくださるために、「日曜日」に復活してくださったからです。

日曜の朝、墓に行ったマグダラのマリアから、「からの墓」を知らされた弟子のペトロとヨハネが、それを見届けた日の夕方から8日目の出来事を今日の福音は語ります。

イエスが、カギがかけられた部屋に入って来られたことが、イエスの体が蘇生ではなく、復活の体である印でしたが、亡霊ではないかと恐れた弟子たちに、イエスの開口一番は “あなた方に平和があるように” でした。平和の心こそが、これから弟子たちを “父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす” ことになる、イエスの使者としての必須条件だからです。そして以後は、イエスに代って、人を癒し、罪を許す司祭宣教者となるために、神の力である聖霊を受けるのです。

世に神をもたらすのは、人間の業ではなく、神ご自身です。

聖霊に満たされた弟子たちは、世が頼る武力によらず、平和の使者となって、非対立で堂々と声を上げて、福音を述べ伝え、死をも恐れぬ人となっていきます。

イエスに出会って喜んだ弟子たちの場に、一人居合わせなかったトマスは、復活の主を知らない闇の中に彷徨う世の人々の象徴でした。人は、主と出会った弟子の言葉を信じたら、信じた通りになるのです。”見ないのに信じる人は幸い” とトマスに戒めた主は、「見ないで信じる幸い」を私たちに促しておられます。



見えるものしか信じない世界の、信じる心が萎えているのは、へたな哲学と合理主義がもたらす神不在の、愛と忍耐の不足からでしょうか？ 今、長期にわたるウイルス禍にあって、重ね重ね大切なことは、生活の中に神を取り戻し、信仰の人になることです。“信じたら信じた通りになる” ために。